



淡路の分間絵図と地域研究：「鳴門の渦潮」プロジェクトに寄せて（フィールドレポート1）

平井，松午

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:137-142

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505421>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505421>



Field **1** Reports

淡路の分間絵図と地域研究 ― 「鳴門の渦潮」プロジェクトに寄せて

平井 松午

一 「鳴門の渦潮」プロジェクトへの参加

― 分間絵図の調査

令和五・六年度（二〇二三・二四年度）の二ヶ年度にわたって実施された「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトは、平成二七年度（二〇一五年度）に設置された「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会の下に実施された。同プロジェクトの実行委員会会長で兵庫県立歴史博物館長（当時）であった藪田貫先生のお誘いを受けて、筆者もこの「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトに参加した。

藪田先生からのご依頼は、淡路三市に残る分間絵図^{ぶんげんず}に関する調査協力であった。淡路国分間絵図の概要については同プロジェクト報告書『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観』の解題（一二九～一三三頁）にまとめておいたが、調査はお

もに兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室コーディネーター（当時）の坂江渉先生らと一緒に実施した。筆者は沼島^{ぬしま}を除き一〇回の調査（現地見学を含む）に同行させていた。調査の段取りについては藪田先生や坂江先生が事前に三市（淡路市・洲本市・南あわじ市）の関係者と詰めていただいていた。当方は分間絵図の閲覧・写真撮影に集中することができた。

なお、筆者は平成二八年九月に「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会の専門委員に追加招集され、翌二九年三月に刊行された同委員会による報告書『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書／文化編』に「古地図・絵図にみる「鳴門の渦潮」と題して、近世期の古地図・絵図類に描かれた鳴門海峡について通観するとともに、渦巻き状に描かれた渦潮が日本図や名所絵図に欠くことができないアイテム（地図記号）であったことを解説した。

今回のプロジェクト報告書『鳴門の渦潮』と淡路島の文化的景観』でも、分間絵図解題とは別に、伊能忠敬^{ただたか}が文化五年（一八〇八）に実施した四国淡路測量（第六次測量）時に作製された伊能忠敬記念館所蔵の下図や麓絵図^{あしづゑ}をもとに、鳴門海峡および播磨灘沿岸における測量成果の一端を報告させていただいた。なお、伊能忠敬らの第六次測量事業では、徳島藩のみならず宇和島藩や大洲藩、高松藩においては地元^{地元}の測量家も伊能測量に参加していて、四国ではその後、全国的にみても先進的かつ精度の高い測量絵図が作製されている。伊能測量は、測量技術・科学技術の普及という側面でも各地に大きな影響をもたらしたといえる。

二 阿波・淡路における分間絵図の概要

徳島藩による分間絵図の作製は、阿波国分についてはおもに文化三年（文政一〇年（一八〇七）二七）頃で、引き続き淡路国分は文政一〇年（天保一三年（一八四二））頃に実施されている。徳島藩の測量事業については関係文書を欠くためその詳細は不明であるが、分間絵図（村図）を編集した郡図・国図では隣村境界が明確に図示されていることから、分間絵図の作製目的は村界（村境）の確定にあったといえる。測量や地図作製にあたったのは、「御絵図方奉行」の岡崎三蔵や

倅^{すけ}の夫左衛門、下役を努めた山瀬佐蔵^{すけぞう}・森清介らとみられる（平井二〇一四a）。

岡崎三蔵らの事蹟や測量法については、徳島県立図書館所蔵の稿本『阿淡両国絵図面』『図解 南阿量地法国図付録』などや、日本学士院にほぼ同内容の写しである「岡崎家文書」五冊が残されていて、これらの資料をもとに『徳島県史 第四巻』（一九六五・三六三～三六七頁）で岡崎三蔵や分間絵図などが紹介されている。ただし、これらの稿本は明治期以降の編纂物であり、内容的には留意すべき点が多い。

分間絵図（村図）は、江戸時代の行政末端単位である藩政村（藩制村）ごとに絵図面二寸一町、すなわち縮尺一八〇〇分の一の大きさで作製されている。ただし、藩政村規模が小さい場合には複数の村がまとめて作製され、規模が大きい場合には分割される場合もある。阿波国津名郡千草村（現・洲本市）はおそらく淡路国内で最も村域面積が広く、分間絵図（正図）は里分・山分の二枚からなっている。このうち山分絵図の法量は東西二四二^サ × 南北三三一^サと畳五枚分にも相当する（淡路国の分間絵図一覧は報告書『鳴門の渦潮』と淡路島の文化的景観』一三四～一三七頁を参照のこと）。

分間絵図（村図）には、凡例にある道・堤・田畠のみならず、家屋・神社・小祠・寺院・庵・川筋などが詳細に描画され、その位置・形状も極めて正確である。さらに凡例奥書に

は村の境界線の総延長が「外周 二里二十七町六間」などと記され、時には「先山直立 二百五十一間」と山の高さまで記す。こうした数値は、彼らが行った「廻り検地」と呼ばれる閉合トラバース測量結果から算出されている。スケールは異なるものの、伊能忠敬が行った測量でも基本的には同じ測量法が採られた。

すなわち、測量時に村の境界線上に立てた印杭（測点）間の平面距離を累計することで村の「外周」総延長を計測するとともに、その印杭（測点）間の勾配ごとの標高差を累積したものが山の「直立」標高として算出されたとみられる。傾斜面の勾配（傾斜角度）の計測には象限儀が用いられ、今日の三角関数に相当する「割円八線表」と呼ばれる数表により平面距離（地理的距離）や標高差（比高）が算出された。

分間絵図に記された「外周」距離を現在の地図上での計測値と比較しても、その誤差は山間地域の村々も含めてもおおむね数%以内に収まる（平井二〇一四b）。当時、これだけ精度の高い測量にもとづいて作製された絵図は全国的にも稀である。岡崎三蔵らが分間絵図に「外周」距離や山の「直立」標高をあえて記載したのも、測量技術に対する自信の表れともいえる。

ちなみに、日本の地図づくりを担う国土地理院において、都市部や平地部を中心に縮尺二五〇〇分の一国土基本図

というスケールの大縮尺図が作製されたのは、昭和三五年（一九六〇）のことである。それを上回る縮尺一八〇〇分の一の大縮尺図が、今から二〇〇年も前に徳島藩で作製されていたことは特筆すべきこともある。

岡崎三蔵らは、作製した分間絵図（村図）を郡単位に編集して絵図面二分一町、すなわち縮尺一万八〇〇〇分の一の「郡図」、さらに絵図面二寸一里（但し一里五十町）の縮尺九万分の一で描かれた「国図」を作製している。「阿波国図」については文政十一年（一八二八）、「淡路分間御国図」については嘉永二年（一八四九）の年紀のある国図が、「とくしまデジタルアーカイブ」（徳島県文化の森総合公園）の「絵図・地図」サイトにアップロードされているのでご覧いただきたい。ただし、稿本『阿淡両国絵図面』では「阿波国図」を天保二年（一八三一）一〇月、「淡路国図」を弘化四年（一八四七）一月の完成としている。ちなみに、金沢藩や鳥取藩でも領国を単位とする測量絵図が作製されているが、村図↓郡図↓国図（大・中・小縮尺図）という手法で領国図が作製されたのは徳島藩だけである。

なお、明治三年（一八七〇）には、分間絵図をベースとして「八厘一丁」（縮尺四万五〇〇〇分の一）による木版刷りの「阿波国全図」「淡路国全図」も上梓されている。これは、前年の版籍奉還によって誕生した徳島藩が作成したとみられ

る。

三分間絵図を用いた研究の動向

分間絵図（村図）は各二部作製され、藩主蜂須賀家と各郡代役所に提出された。ただし、控図や写図も含めて今日確認できる分間絵図（村図）は、阿波国が約五八〇ヶ村中約七〇ヶ村、淡路国が約二五〇ヶ村中一〇〇ヶ村ほどである。同様に写図も含めると、郡図は阿波国が三好郡・海部郡を除く八郡、淡路国については津名・三原両郡分が確認できる。

『徳島県史 第四巻』において分間絵図が紹介されて以降、分間絵図についてはたびたび紹介されてきたが、分間絵図を用いた研究事例は意外と少ない。

そうした中で、分間絵図を用いた地域研究に取り組んだのが歴史地理学研究者の羽山久男氏で、氏は監修した『上勝町誌』（一九七九）や自著『山村地域の史的展開——徳島県勝浦郡上勝町——』（一九八一）において、分間絵図や新田検地帳などにもとづいて山間部の新田開発や集落の祭祀構造などを明らかにしている。氏はその後も精力的に阿波国内における分間絵図の所在調査や分析を進め、土地開発や条里景観、塩田、郷町、河川空間などをテーマに次々と成果をあげ、大著『徳島藩分間絵図の研究』（二〇一九）にまとめられた。

羽山氏は淡路の分間村絵図についても所在調査を進め、『徳島藩分間絵図の研究』では、淡路島に卓越する溜池景観と水利組織である田主との関係や、新開検地帳・検地絵図を併用して土地開発を論じるとともに、分間絵図をもとに国府推定地や屯倉神社跡、千光寺、棚田・断層景観などについても取り上げている。今年（二〇二五年）八五歳となる羽山氏の絵図研究は、徹底した所在調査と絵図記載内容の詳細な分析にあるが、そうした成果を支えているのは、撮影した写真をもとにロットリングを駆使して自らトレース図を作図し文字解読していく研究姿勢であろう。

なお筆者（二〇一二）も、上勝町「檜原の棚田」の重要な文化的景観の指定（二〇一〇年）にあたって、文化一〇年（二八・三三）作製の檜原村分間絵図と平成一二年（二〇〇〇）撮影の航空写真との比較から、二〇〇年近くにわたって棚田景観に大きな変化がみられず、ムラ・ノラ（集落・田畠——サトヤマ（里山・入会地）——ミヤマ（深山・奥山）といった日本山村に特徴的な三圏構造（空間構造）が当該地域にもみられることを指摘した。

このように、土地開発や景観・空間構造の解明にあたって分間絵図が用いられてきたが、今回の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト報告書『鳴門の渦潮』と淡路島の文化的景観』においても、淡路国府の所在地比定や、近世村落ならびに湊

浦の文化的景観の考察などに分間絵図が活用されている。

藪田貫氏による報告「淡路の浦と「名所図絵」・「分間絵図」

——由良・江井浦・湊浦・古津路——」（八七〜九五頁）では、

「淡路四草」と称される近世後期の地誌書類や「淡路名所図絵」などと相互補完する形で分間絵図を分析することで、湊・浦の成立や文化的景観への新たな研究アプローチの手法が提示されている。

そのような視点から分間絵図を用いた地域分析をさらに深化させた報告が、木村修二氏の「分間絵図に保存された景観——沼島浦と福良浦——」（一〇二〜一一四頁）である。沼島浦については、分間絵図における島の集落や土地利用、植生表現、岩礁や海岸線、建物・施設の描画内容を戦前絵葉書や古写真などから比較検証するとともに、福良浦についても同様な視点・手法で、徳島藩の御屋敷や渡海場を中心に形成された福良市街地や新旧街道、土地利用・家屋、湾内島嶼部の地形や景観などの変化について分析している。江戸後期における地域の景観復原のみならず、後年の資料と比較検証することで、地域の変化を詳細にトレースすることが可能になる事例報告でもある。

この他に、一ノ瀬友博・伊藤休一（二〇〇七）は、嘉永二年（一八四九）作製の津名郡図・三原郡図において茶色（凡例では黄色）で着色された林野の範囲を昭和五七年

（一九八二）の現生植生図と比較した結果、林野面積の総量に大きな差異がないことを論じている。

以上のように、一九世紀前半に作製された徳島藩の実測分間絵図は「一般図」としての性格が強く、その精度も極めて高い。同時期に領国全域をカバーする絵図資料は他にはなく、後年の地形図や空中写真などとの比較分析なども可能となることから、地域史研究を進める上で有用な資料といえる。ただし、一部に法量が縦横数倍にも及ぶ大型絵図や近世社会特有の表記がみられる絵図も含まれることから、利用にあたっては制約があることも理解しておく必要がある。そうした理解の上で、今後の淡路研究において分間絵図が活用されることを願う次第である。

最後に、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの実施にあたってお世話になった藪田先生、坂江先生はじめ、関係機関・関係者の皆様に御礼申し上げます。

主な参考文献および関連サイト

一ノ瀬友博・伊藤休一（二〇〇七）「淡路島における江戸時代後期の林野の分布と昭和時代の比較」農村計画学会誌二九巻特集号、二〇〇七年、二〇三〜二〇八頁。

『鳴門の渦潮』調査研究プロジェクト実行委員会編集・発行 二〇二五
『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観』。

羽山久男 一九八一『山村地域の史的展開——徳島県勝浦郡上勝町

——『私家版。』

羽山久男 二〇一九 『徳島藩分間絵図の研究』 古今書院。

平井松午 二〇一二 「棚田の景観を歴史地理的に考える——近世実測図とGISを活用した文化的景観調査——」日本の原風景・棚田(棚田学会誌 一三、四七〜五六頁)。

平井松午 二〇一四 a 「徳島藩の測量事業と実測分間絵図」・b 「実測分間絵図の精度に関するGIS検証」(平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院)七七〜九八頁・九九〜一一一頁。
平井松午 二〇二五 「淡路国分間絵図」解題 附「淡路国分間絵図」所在マップ・一覧表(「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会編『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観』一二九〜一三七頁)。

徳島大学附属図書館HP「貴重資料高精細デジタルアーカイブ(近世古地図・絵図コレクション)／徳島」<https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/>
徳島県文化の森総合公園／とくしまデジタルアーカイブ「絵図・地図」
<https://adeac.jp/tokushinabunkanomoritop/>